# 中高生とともに差別と闘う

## 『ヒナ鳥は飛べてるか』

吉成タダシ

### 「森を見て木を見ず」

出版社の名誉のために少し付け加えておきます。

編集の打ち合わせなどで何度か東京本社にお邪魔し、担当の方々とお話をさせていただく機会がありました。そこで分かったことがありました。部落差別の現実がどこまで伝わるか分からない不安のなかで、私のなかにある思いについて話をしたときのことです。その方は東京で生まれ育ち、部落問題をまったく知ることなく北海道の大学へ行き、過ごした札幌の地で、アイヌ問題に初めて出会ったことへの衝撃を語ってくださいました。

また別の方は、『ペットボトル・マジック』に出てくる「人権委員会」のことについて話してくださいました。私の地元周辺の学校では、児童会や生徒会に「人権委員会」があることは常識なのですが、どうやら、「私の常識はあなたの非常識、あなたの常識は私の非常識」だったようで、東京周辺の学校には、「人権委員会」というもの自体が存在しないとのこと。周囲の多くの方々に随分と聞き取りをしてくださったようですが、地域性や文化の違いなのでしょう、どうやら一般的ではなかったようで、それは私にすれば驚きというか、勉強になりました。

「木を見て森を見ず」の逆といえばいいでしょうか。出版社という森だけを見て、私はすべてを判断してしまうところでした。木という個人とていねいに向き合い対話をしていくと、自分に見えてなかった、自分が見ようとしてなかったことが見えてきて、基本的な過ちに陥りかけていたことに気づき、自分の愚かさにショックを受けたのです。

差別問題でも、様々な被差別の立場に置かれている方々を、自分のもっている全体的なイメージで判断して言っているのを聞くことがあります。冷静に考えれば、それぞれが違うことくらい分かるはずなのですが、愚かさというか、人間の弱さでしょうか。ついつい「森を見て木を見ず」に陥っていたりします。

### 壁を壊す

いろんな学びや気づきが得られた出版という出来事は、今いる場所にとどまらず、新たな世界に飛び出していくことの大切さをあらためて教えてくれました。自分と同じ考え、似たような意見の人といることは楽なことかもしれません。でも、そこで居続ける限り、新しい自分を手に入れることはできないのです。眼の前にある壁を壊し、今いる場所から飛び出し、自分とは違った考えや意見の人と対話することで、新しい何かと出会い、今とは違った自分に生まれ変われる可能性が広がるのです。変化に対する恐れやリスクもあるでしょう。でも揺さぶられることで、自分の立ち位置や軸足がどこにあるのかを確かめることができます。やはり、壁をつくらず対話することなのだと思います。対話することから逃げないこと、対話することを諦めないことなのだと思います。それですべてが解決するとは思いませんが、少なくとも対話の扉が開いている限り、解り合えるチャンスはあるのだと思うのです。自らその可能性を閉じないことなのだと思うのです。

### ヒナ鳥は飛べてるか

さて、人権学習に取り組みながら、ここ数年ずっと、対話することの意味について考えてきたのですが、昨年思いがけず、この「対話」という言葉に出会う場面がありました。

長年、「学級という枠を超えて学年全体で」、また「学校という枠を超えて他校の生徒と」人権について本気で語り合う取組をしてきました。生徒それぞれのなかにあるいじめや差別の現実、また差別意識が吹き出し、熱く語り合う中学生の姿を幾たびも見てきました。

その一方で、自分の中でずっと気懸かりになっていたこともありました。それは、「あのときのヒナ鳥だった子たちは、あれからどんな成長をしたんだろう」ということでした。あのときの学びが、そのときだけのものであってほしくない。あのときの学びが、それ以降の人生の飛翔へとつながっていてほしい。そんな、祈るような思いをずっともっていました。でも、それを確かめることなく、時間だけが過ぎ去っていたのです。

昨年、それを確かめる追跡調査を行うことができました。二十歳～三十歳代の元教え子たちに当時の人権学習について問いかけたのです。返事のなかにはハッとさせられるものも多く、これからの人権学習を考えていくうえで、貴重な資料となりました。ヒナ鳥の「その後」を紹介します。

### あるヒナ鳥の祖母

「先生、聞いていただけますか？

私の祖母は二年前に他界したのですが、字が読めませんでした。それは私が生まれた時からそうだったので何の疑問もありませんでした。戦時中に幼少期を過ごした祖母は、戦争のせいで学校に行けなかったから、字が読めないんだと私の中で勝手に思っていました。

小学生の頃、祖母と一緒にお風呂に入るのが楽しい時間の一つでした。湯船に浸かりながら祖母が小学生の頃の話をしてくれたのを思い出しました。『家の手伝いとか兄弟の面倒を見るのが先で、たまにしか小学校に行ってなかったのよ。たまに行ってもお弁当を持って行ってなかったから、お昼の時間になるとトイレに閉じこもってやり過ごしていたのよ』そういう話を聞いていました」

三十歳代の彼女が、今になって祖母のことを伝えてきました。みなさん、戦時中を過ごした身近な方々がどうであったか思い返してみてください。戦時中だからと、このおばあさんの実態を捨てておいていいものでしょうか。

（次回「「大阪の問題」ではない！」）

イラスト　中島　亜唯